

k-536

米沢市埋蔵文化財報告書 第40集

一ノ坂

一ノ坂遺跡発掘調査概報

第 4 集

平成 6 年 3 月

1994

米沢市教育委員会

米沢市埋蔵文化財報告書 第40集

一ノ坂

一ノ坂遺跡発掘調査概報

第 4 集

平成 6 年 3 月

1994

米沢市教育委員会

序 文

一ノ坂遺跡の発掘調査は、平成元年度の個人住宅建設工事に伴う緊急発掘調査が最初であります。

この時の調査において、全国から注目されている国内最長の大型住居跡を発見しました。

大型住居跡発見の重要性を踏まえ、平成2年度からは文化庁の補助を受け、学術調査として、本年度まで発掘調査を継続してまいりました。

本報告書は、本年度実施した一ノ坂遺跡の第7次調査によって得られた成果の概要をまとめたものです。

今回の調査では、平成4年度調査で確認した仮称「連房型竪穴住居跡」の全容を解明することができました。

本調査の結果から、大型竪穴住居跡は石器を製作する「工房跡」、連房型竪穴住居跡は「宿舎跡」と想定でき、古代の米沢に全国レベルのハイテク工場があったのか考えると、ロマンがさらにふくらみます。

詳細につきましては、本報告書に譲るところとしますが、本遺跡における一連の発見は縄文社会を再確認する上で価値の高い資料になるものと、自負しているところであります。

今後も、本遺跡の全容解明に向け尽力してまいり所存ですので関係各位の一層のお力添えをお願い申し上げます。

最後になりましたが、本遺跡の調査にあたり、格別のご指導を賜りました文化庁、山形県教育文化課、そして多大なるご協力を賜りました地権者の丸山亥吉氏、赤木友之氏、赤木伊勢吉氏、渡部重夫氏に対し、心から御礼を申し上げます。

平成6年3月31日

米沢市教育委員会

教育長

小 口 豆

例　　言

1. 本報告書は、文化庁の国庫補助を受けて、平成5年度（1993）に実施した一ノ坂遺跡「大型竪穴住居跡」周辺の開発予定地域、調査概報第4集である。

2. 発掘調査は、米沢市教育委員会が主体となって、大型竪穴住居跡確認に伴う周辺開発予定地域の第7次調査として平成5年4月15日～同年6月19日の期間で実施したものである。

3. 調査体制は下記の通りである。

調査総括　　木村琢磨（文化課長）
調査担当　　手塚 孝（文化課埋蔵文化財係主任）
調査主任　　菊地政信（文化課埋蔵文化財係主任）
作業員　　遠藤忠一、遠藤昭一、小浦文吉
　　　　　　中島国雄、松本三郎、羽賀二雄
　　　　　　原 三郎、鳴貫六助、丸山トシコ
　　　　　　武田房次郎、菊地そのえ

事務局　　我妻淳一（文化課長補佐）
　　　　　　月山隆弘（文化課埋蔵文化財係主事）

調査指導　　文化庁、山形県教育庁文化課

調査協力　　丸山亥吉、赤木伊勢吉、赤木友之、渡部重夫、堤 善

4. 掲図、図版の縮尺は各図面、写真にスケールで示した。

5. 本書の作成は菊地政信が担当した。全体的に手塚 孝が総括した。責任校正は我妻淳一がその責務にあたった。

6. 石器実測図、土器拓影図の各遺物につけてある番号は、写真図版と同一番号を使用している。

7. 石器、土器の出土地点は掲図に示した。「F」は包含層の覆土、「f」は造構の覆土を表わす。

8. 造構等の土色については、「新版標準土色表」（小山、竹原1973）を参考にした。

本文目次

(表紙題字は米沢市教育委員会教育長 小口 亘による)

序文

例言

目次

1. 遺跡の位置と調査に至る経過	1
2. 調査の経過	1
3. 検出遺構	3
住居跡	3
土壤	9
4. 検出遺物	10
石器	10
土器	10
5. まとめ、参考文献	22

挿図目次

第1図 一ノ坂遺跡位置図	2
第2図 一ノ坂遺跡グリット配図	4
第3図 一ノ坂遺跡第7次調査H Y17平面図	5
第4図 一ノ坂遺跡第7次調査遺構全体図	7・8
第5図 一ノ坂遺跡第7次調査出土石器実測図(1)	11
第6図 一ノ坂遺跡第7次調査出土石器実測図(2)	12
第7図 一ノ坂遺跡第7次調査出土石器実測図(3)	13
第8図 一ノ坂遺跡第7次調査出土石器実測図(4)	14
第9図 一ノ坂遺跡第7次調査出土石器実測図(5)	15
第10図 一ノ坂遺跡第7次調査出土石器実測図(6)	16
第11図 一ノ坂遺跡第7次調査出土土器拓影図(1)	17
第12図 一ノ坂遺跡第7次調査出土土器拓影図(2)	18
第13図 一ノ坂遺跡遺構全体図	19・20
第14図 一ノ坂遺跡H Y14, 17平面図	21

図版目次

卷頭図版 第7次調査区全景 H Y17完掘状況

- 第一図版 一ノ坂遺跡第7次調査の発掘 (1)
第二図版 一ノ坂遺跡第7次調査の発掘 (2)
第三図版 一ノ坂遺跡第7次調査の発掘 (3)
第四図版 一ノ坂遺跡第7次調査の発掘 (4)
第五図版 一ノ坂遺跡第7次調査の発掘 (5)
第六図版 一ノ坂遺跡第7次調査出土の土器 (1)
第七図版 一ノ坂遺跡第7次調査出土の土器 (2)
第八図版 一ノ坂遺跡第7次調査出土の石器 (1)
第九図版 一ノ坂遺跡第7次調査出土の石器 (2)
第十図版 一ノ坂遺跡第7次調査出土の石器 (3)



▲一ノ坂遺跡第7次調査遺構全景（上空から）



▲手前からHY14・17・24・16（北から）

1. 遺跡の位置と調査に至る経過

本遺跡は、米沢市街地西方約2kmに位置し、矢来一丁目に所在する。遺跡周辺の地形は、笛野山丘陵の西端となる羽山山麓から東に張出した緩やかな舌状微高地で、標高259～261mを測る。

遺跡範囲は、東西220m、南北310mで、現況は宅地・畑地・果樹園等が広がり、四季に応じて変貌する地域である。本遺跡周辺の舌状微高地には、生蓮寺、地蔵園、館山、宮ノ前等の绳文前期・中期を主体とした40数箇所の遺跡群が旧松川、旧鬼面川の河岸段丘上に沿って分布する。

平成元年度（1989）に本遺跡内での宅地造成計画に伴ない、本市教育委員会が発掘調査を実施した結果、国内最長の大型竪穴住居跡（43.5m）と、石器、剝片類を中心に138万点にも及ぶ多量の遺物が検出された。これらを踏まえ、文化庁並びに県教育文化課の指導のもと、大型竪穴住居跡に埋土をして現状保存している。この事業に際しては、地権者の故山田誠次郎、赤木伊勢吉、赤木友吉、各氏のご協力によるものであった。

本市教育委員会では本遺跡の重要性に鑑み、平成元年度の春の調査を第1次調査に同年の秋の調査を第2次調査、翌2年度には国・県の補助を得ながら第3次・4次調査、3年度には5次調査を、さらに4年度には第6次調査を実施しており、今回の5年度は第7次調査にあたる。

2. 調査の経過

今回の調査区は、第1次調査区（大型竪穴住居跡）の南東側にあたり、河岸段丘上の直下に位置している。平成2年度から4年度に実施した発掘調査箇所を対象とし、第4次調査・第5次調査の下層面であり調査面積は約800m²であった。

調査は平成5年（1993）4月15日（月曜日）から開始した。最初に昨年度に埋め戻した箇所の表土剥離を開始した。この箇所の遺構確認面には、目印になるようにシートをしいておいたので、どこまで掘り下げるのか目安になった。この作業には4日間を要する。

第6次調査では5棟の竪穴住居跡を確認しており、HY18まで番号がついているので、今年度の住居跡はHY19より、番号を付けることとし、確認した順に番号を付けた。昨年とは異なる展開を見せたのが、HY17・18であった。HY17を精査したところ、2棟であることが判明した。

今回の調査はプラン確認に重点をおき、床面まで掘り下げたのは1棟だけである。昨年はHY14を掘り下げていることから関連するHY17を掘り下げることにし、掘り下げには約1週間を要した。その後トレンチを北側と東側に配し、地山まで掘り下げた。同年6月7日には上空から、写真撮影を行い、終了後は遺構群の実測図作成に着手する。

同年6月10日には文化庁の岡村先生が来訪され、掘り下げは1棟にとどめ、他は現況のまま埋戻すことに決定した。同年6月15日までに遺構群の実測図を終了し、同年6月16日午前10時に現地説明会をおこなった。平日にもかかわらず約50人の来訪者でぎわった。現地説明会終了後の午後から、埋戻しを開始する。埋戻に際し、将来のことを考えて遺構確認面には石灰をまいておいた。同年6月19日で第7次調査を終了した。



第1図 一ノ坂遺跡位置図

3. 検出遺構

今回の第7次調査区は第2図に示す地域であり、検出した遺構の箇所については第4図を参照願いたい。検出した遺構は竪穴住居跡H Y19、20、22、23、24の5棟と土壙D Y26~29の4基、風倒木坑F Y25の1基であった。H Y16、18は第6次調査でプランの一部を確認している。また、第6次調査でH Y17と命名した竪穴住居跡は今回の精査で2棟であることが判明し、南側をH Y24と呼ぶことにした。

北トレンチ周辺に確認したH Y21は、精査の結果自然の落ち込みであり、H Y21は欠番となった。この落ち込みからは、第5図2、4、7の石礫3点、同図19、第6図の石匙2点、石匙未完成品第7図34、第8図42の2点等の出土がある。土器はループ文12点、斜縄文9点、羽状縄文3点が出土している。他に剝片121点、凹石5点、磨石5点が出土した。

竪穴住居跡群は段丘直下の地山を掘込んで構築されているのが特徴で、覆土の上層部には円形状に焼土を含み、平面形状は長方形状を呈す。竪穴住居跡群は隣接して存在することから、「連房型竪穴住居跡」と命名した。ここでは、第6次調査で確認した竪穴住居H Y14~18の5棟もふくめて、北から順に説明したい。

H Y23 [第4図]

4.6 m × 3.4 mを測り、やや離れて存在する竪穴住居跡である。「連房型竪穴住居跡」の中には加わらないものと想定される。ただし、埋土状況や構築面から判断すれば同時期と考えられる。遺物は確認面の埋土より、チップ4点、フレーク10点、両面調整石器第6図27、小形土器1点が認められた。文様は刺突文を施している。

H Y15 [第4図]

H Y23と2.6 m離れて構築されている。H Y15、14、17、24、16、22、20、19の8棟が「連房型竪穴住居跡」に加わるものとみられる。全長は約44 mに達する。H Y15は最も長い住居跡であり、幅3.4 m、長さは11 mを測る。確認面からは石礫2点、石匙2点、尖頭状石器4点、エンド・スクレーパー1点、両面調整石器2点、石鉈2点、欠損面を有す石器1点、チップ14点、フレーク175点、土器類はループ文様を施した土器片36点、組紐文14点、羽状縄文5点、ループ文様に無文帯を有す土器片2点、小形土器1点、刺突文とループ文を組合せた土器2点が出土している。遺物の出土量は、床面まで掘り下げたH Y17を除き、最も多い竪穴住居跡である。

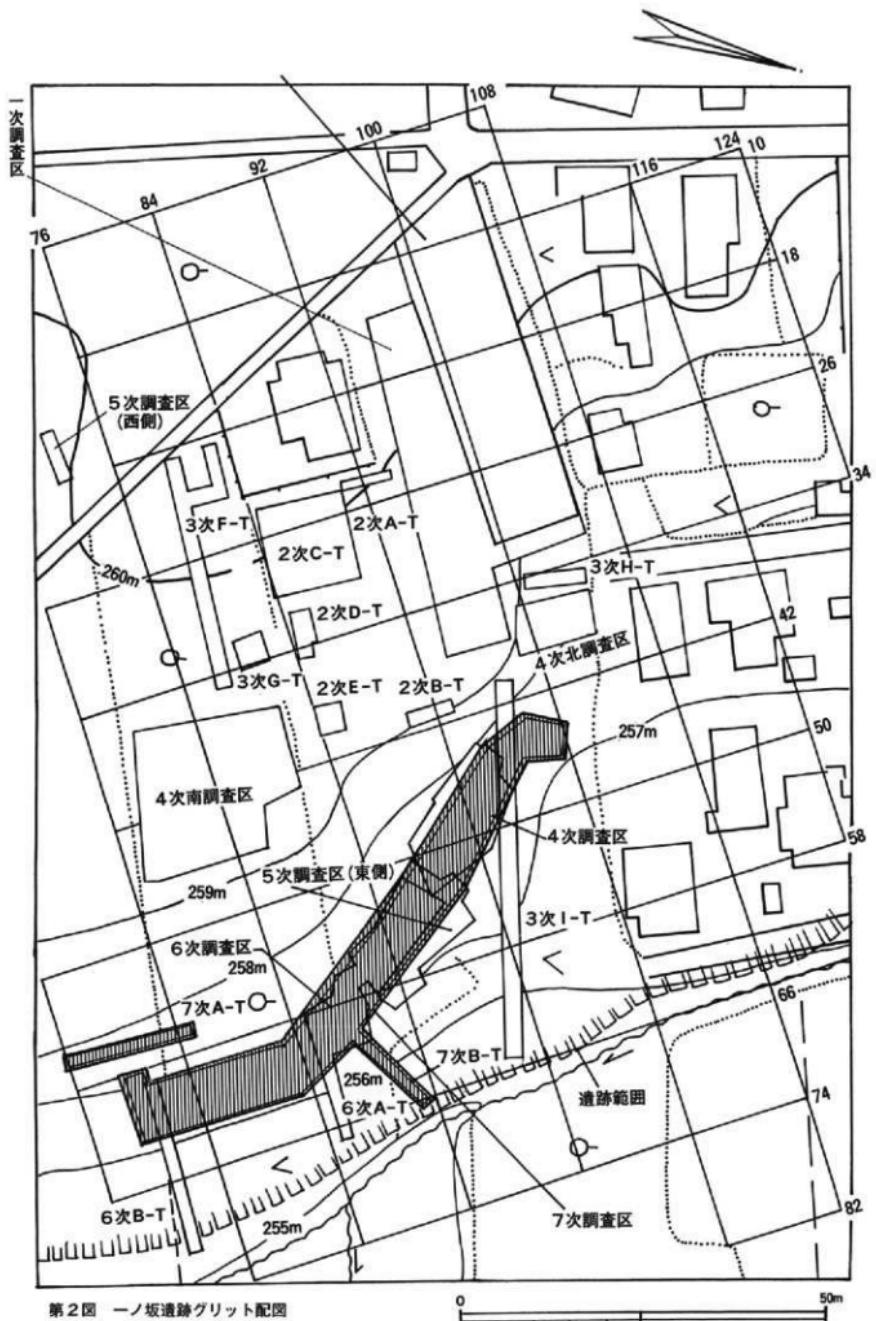
H Y14 [第4図、13図]

第6次調査で床面まで掘り下げた竪穴住居跡である。詳細は第3集に述べているので割愛するが、今回の調査でも、再度埋め戻した土を除去した。全体の写真を撮影する目的である。取りはずすことなく埋め戻したセクションベルトより、第6図26の石鉈状石器が出土している。

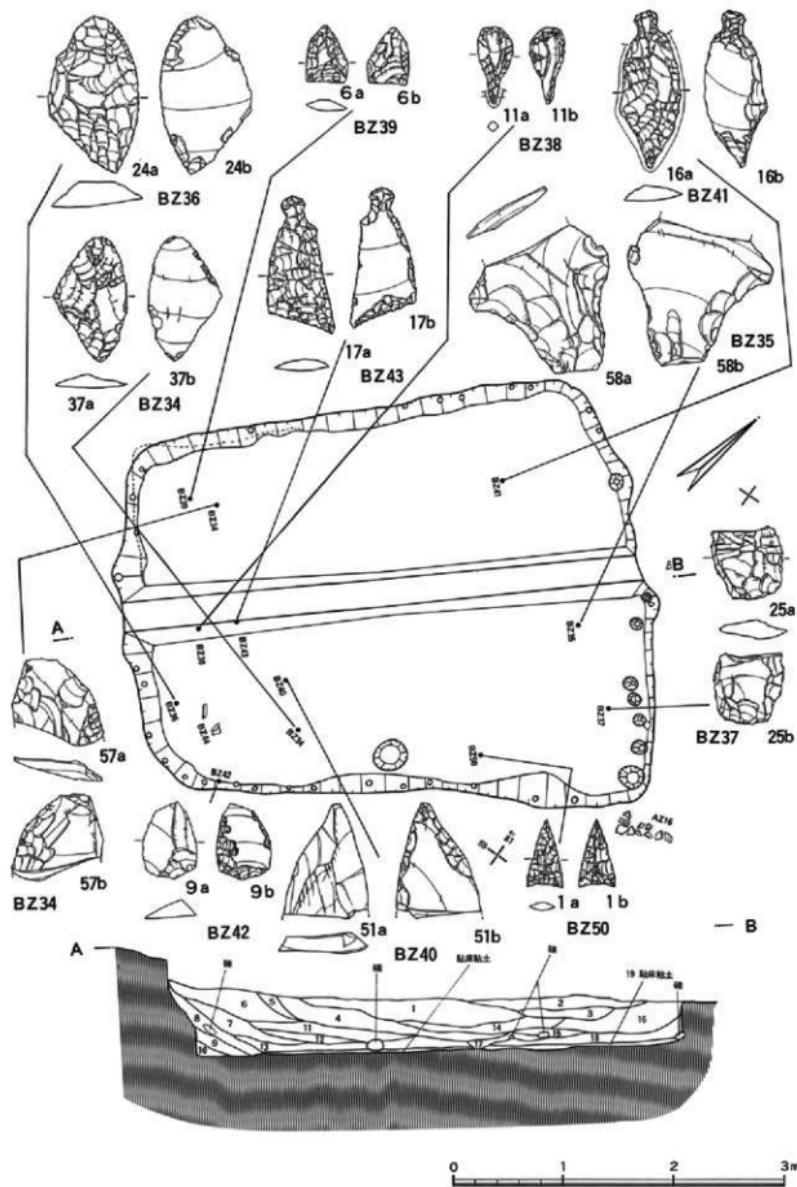
H Y17 [第3、4、13図]

今回の調査で床面まで掘り下げた竪穴住居跡である。壁面の確認は竹箸を用い慎重に進め、壁面に斜状に掘られた小柱穴を確認することができた。

平面形状は、東方がやや幅広くなる不整形形状を呈し、東西4.77 m、南北は西側で3.15 m、東側では3.88 mを測る。壁の深さは斜面を掘り込んでいることから、段丘側が深く65 cm、東方部は40 cmを測る。埋土は自然堆積状況を呈し、礫を含む。



第2図 ノ坂遺跡グリッド配図



第3図 一ノ坂遺跡第7次調査HY17平面図

H Y17が構築されている層は疊が多い箇所であり、床面には粘土で部分的に貼床を施しているのが認められた。床面は平坦である。炉は認められなかった。

柱穴は壁直下に9箇所確認できた。東側に集中し、北側には認められなかった。壁中央部には平均5cm位のビットが約45度の角度で28箇所認められた。東側を除き20~50cmの間隔で全周する。深さは10~20cmであった。柱穴の深さは、南東コーナー部が最も深く45cm、他は8~10cmと浅い。東側中央部の2本の柱穴は壁にいくこむように掘りこまれ、間隔が1.3mあることから入口と想定される。

遺物は第5図1、6、9の石鎚、同図16、17の石匙、第6図24、第8図37の石匙未完成品等の他にフレーク138点が出土している。礫器としては凹石2点がある。土器は第11図1、2、5、7、8、が認められ、ループ文片21点、斜縄文32片点、羽状縄文片8点、ループ文に無文帶を有す土器1点、爪形文を施した底部片1点、斜縄文を施した底部片1点、刺突文片1点であった。

遺物の総数は磨滅の土器片を含め184点である。

H Y24〔第4図〕

H Y17とは40cm、H Y16とは30cmの間隔を置いて構築された竪穴住居跡であり、段丘下の地形に沿って掘り込んでいるため、南部幅が狭い形状を呈す。南部が長径で4.3m、東西の北部は4m、南部は3.3mを測る。

遺物は確認面より、フレーク6点、ループ文、斜縄文、平行沈線と刺突文を構成する文様を施す土器片が各1点づつ出土している。ボーリング探査によるとH Y17と同様な壁の深さを有すものと想定される。第6次調査でH Y17と命名した南部に位置す。

H Y16〔第4図〕

H Y22とは30cm離れて構築された竪穴住居跡で、平面形状が示す様にH Y24の縁辺に合せる様に掘り込まれている。南北が長径で5.75m、北部は3m、南部は3.7mを測る。

遺物は欠損面を有す石器第9図46、47が出土している。両者は両面調整であり、尖頭状を有す石器基部欠損石器と考えたい。他にフレーク8点があるが、土器片は認められなかった。

H Y22〔第4図〕

セクション図で示すように、確認面上部には約1mの埋土（中世）があり、ほぼ完全な状況でプランを確認できた。ボーリング探査では、床面まで約70cmを測る。南方のH Y20、19、18も同様な壁の深さを有す。埋土の中央部円形状焼土が特に顕著な竪穴住居跡である。

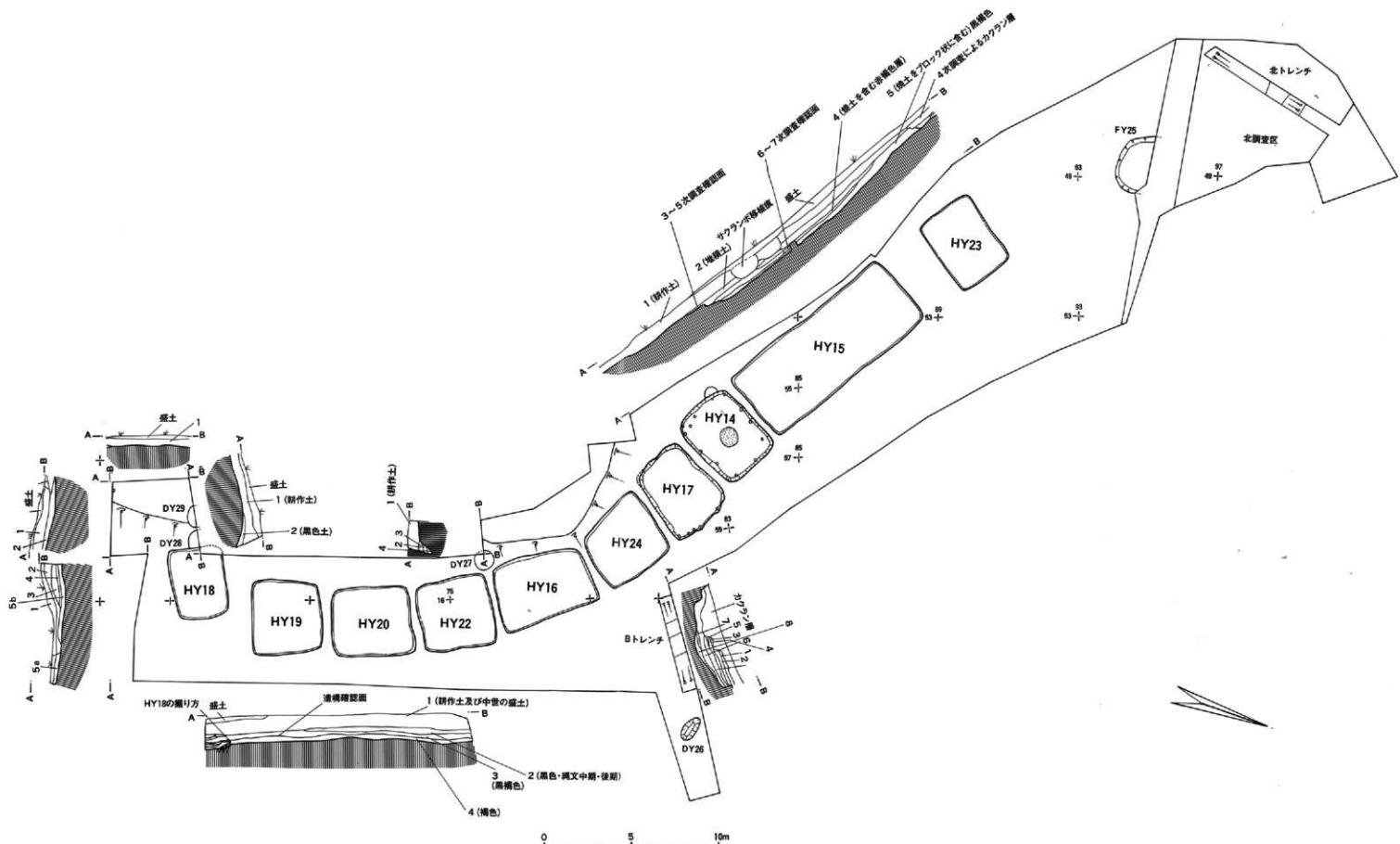
平面形はほぼ正方形を呈し、4mを測る。H Y20とは32cm離れて掘り込んでいる。遺物は第50図10の尖頭状石器、フレーク31点、凹石1点、土器はループ文土器片4点、刺突文1点が出土している。

H Y20〔第4図〕

平面形は南北が4.6m、東西4mを有す方形を呈し、HY22と縁辺が同一方向で接している。遺物は第6図28の両面調整石器、凹石2点、フレーク1点が確認面から認められた。土器類は出土していない。

H Y19〔第4図〕

H Y20と縁辺がややずれて構築されている。平面形は正方形で一辺4.1mを測る竪穴住居跡で、「連房型竪穴住居跡」の南端部に位置す。H Y18とは1.4m離れている。まとめでも述べるが、H Y18と23を含めた「連房型竪穴住居跡」も想定される。



第4図 一ノ坂遺跡第7次調査遺構全体図

H Y18 [第4図]

一連の竪穴住居跡群より、西南方向に2m離れて構築され、今回の調査区では最南端に位置する。ボーリング探査ではH Y18の南方部に隣接する竪穴住居跡はないものと判断している。しかしながら空間地帯があり、さらに竪穴住居跡が段丘直下に存在する可能性は北南部の例からも十分に可能性を残していると言えよう。

平面形状は東西に長径を有す方形状を呈し、東西4m、南北3mを測る。遺物はフレーク3点、ループ文を施した土器片1点が確認面より出土している。第6次調査でトレンチを東西に配した箇所であり、東北部からは縄文中期の土器片が発見された。

F Y25 [第4図]

セクションの埋土状況から判断して、風倒木坑と考えられる。埋土からは総数40点の遺物が検出された。石器は第5図12の石錐、同図15の石匙、第6図29の方形状両面調整石器がある。チップは3点、フレークは21点、凹石2点も出土している。土器はコンバス文とループ文を施した土器片1点、羽状縄文土器片5点、斜縄文土器片5点が認められる。他に羽状縄文を施した小形土器1点がある。

D Y26 [第4図]

長円形状を呈す平面形状を呈し、深さは90cmを測る。遺物はフレーク1点だけであった。埋土状況は自然堆積状況で、8枚に分けられる。埋土には少量の炭火物を含み、赤黒褐土で竪穴住居跡と同様な土色であることから、一連の竪穴住居跡群と同時期に位置づけられ、平面形状の形態や深さ等の吟味からトイレ跡、又は落し穴と推測される。

D Y27、28、29 [第4図]

いづれも、斜面に掘り込まれた土壤群であり、直径1.1mのほぼ円形状を呈す。今回の調査では掘り下げは実施しなかった。斜面に位置する土壤の調査例としては平成2年の5月31日～同年6月14日の期間で発掘調査をおこなった第3次調査がある。第13図に示したD Y1～3の土壤群で埋土から臼玉と石匙、石鏃が出土している。

これらの遺物は副葬品と考えられD Y1～3は土壤墓と報告している。（米沢市埋蔵文化財報告書第30集、一ノ坂遺跡発掘調査概報第1集参照）。

今回のD Y27～29の土壤群もD Y1～3の土壤群と同様なものと位置づけたい。斜面箇所はまだ調査していない箇所が大半を占めることから、他にもまだ存在するものと推測される。

北調査区 [第13図]

段丘が緩やかにカーブする箇所である。当初は確認面に土色変化が認められたので、H Y21と命名し精査をしたが、進行するに従い、包含層であることが判明した。第3次、第4次調査箇所でも、遺構は発見されておらず、平成元年度の第1次調査で発見した大型竪穴住居跡と、「連房型竪穴住居跡」の中間地点は遺構の存在しない空間地帯と考えられる。

東トレンチ [第4図]

地形の形成を確認する目的でH Y24の東方に配した。現況の表土から地山までの最深箇所で1.75mを測る。トレンチ掘り下げの結果、黒褐色土を掘り込んで竪穴住居跡を構築していることが判明した。本遺跡の黒褐色土は縄文前期初頭以前に形成された土層である。

4. 検出遺物

第7次調査区から出土した遺物は、総数1,026点であった。これらの遺物を大別すると、石器、土器及び漆器に分けられる。以下に細別して述べたい。

石器〔第5図～第12図〕

石鎚5点、石鎚未完成石器4点、尖頭器状石器1点、石錐2点、小形三日月形石器1点、石匙9点さらに石匙未完成石器4点、石鎚状石器1点、両面調整石器7点、尖頭状石器4点、エンド・スクレーパー1点、サイドスクレーパー1点、ラウンド・スクレーパー1点、石錐2点、欠損面を有す石器15点の合計58点が今回の調査で出土した石器類である。

剝片は714点ある。1cm以内の剝片をチップ、1cm以上をフレークと分類した。チップは49点、フレークは665点となり、石材はすべて頁岩で占められる。石材の色調から、大型住居跡で発見されている剝片と同一の母岩から剝離された剝片も認められた。代表的な石器群について説明を加える。

石鎚〔第5図1～5〕

基部が平坦な形態と湾曲する形態の両者が出土している。第5図2、4は尖端部が欠損している。

石鎚未完成石器〔第5図6～9〕

いづれも不定形三角形形状を呈し、尖状部の整形も明確でないことから石鎚の製作を断念した石器群と考えられる。

石錐〔第5図11、12〕

両者ともつまみ部を有する小形の石錐で、11の尖端部には使用痕が認められる。12は尖端部が欠損している。

小形三日月形石器〔第5図13〕

D Y27の確認面から出土している石器であり、第5次調査でも同形態の石器が出土している。土壤からの出土であることから副葬品の可能性が強い。類似するものとして第4次調査出土の糸巻状石器がある。これらは石器としての利器よりも、祭祀に関する石製品と考えられる。

石匙〔第5図14～19、第6図20～22〕

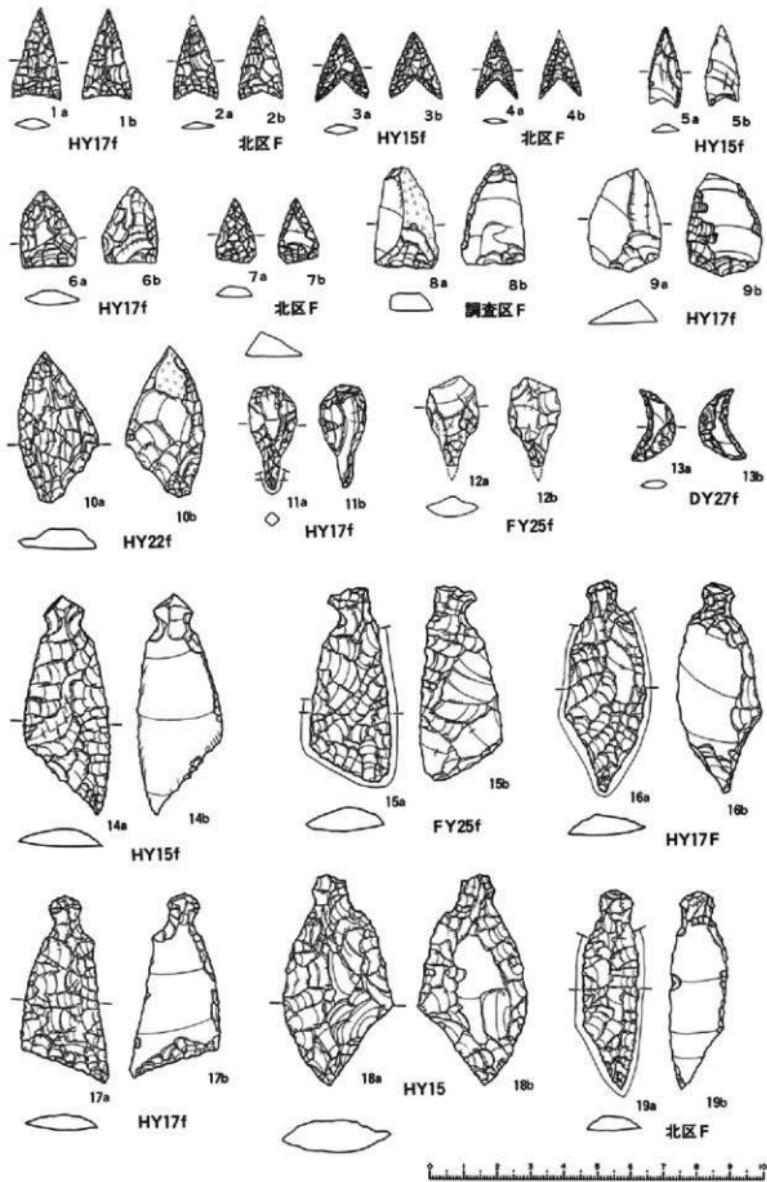
第5図18を除き片面調整で整形された石匙群である。尖状部を有する形態が多く認められ、第5図15と16、19の縁辺に使用痕が認められた。第6図20は尖状部にだけ使用痕が認められることから石錐として使用された石器であるが、つまみ部を整形していることから石匙に分類した。

石錐〔第79図44～47〕

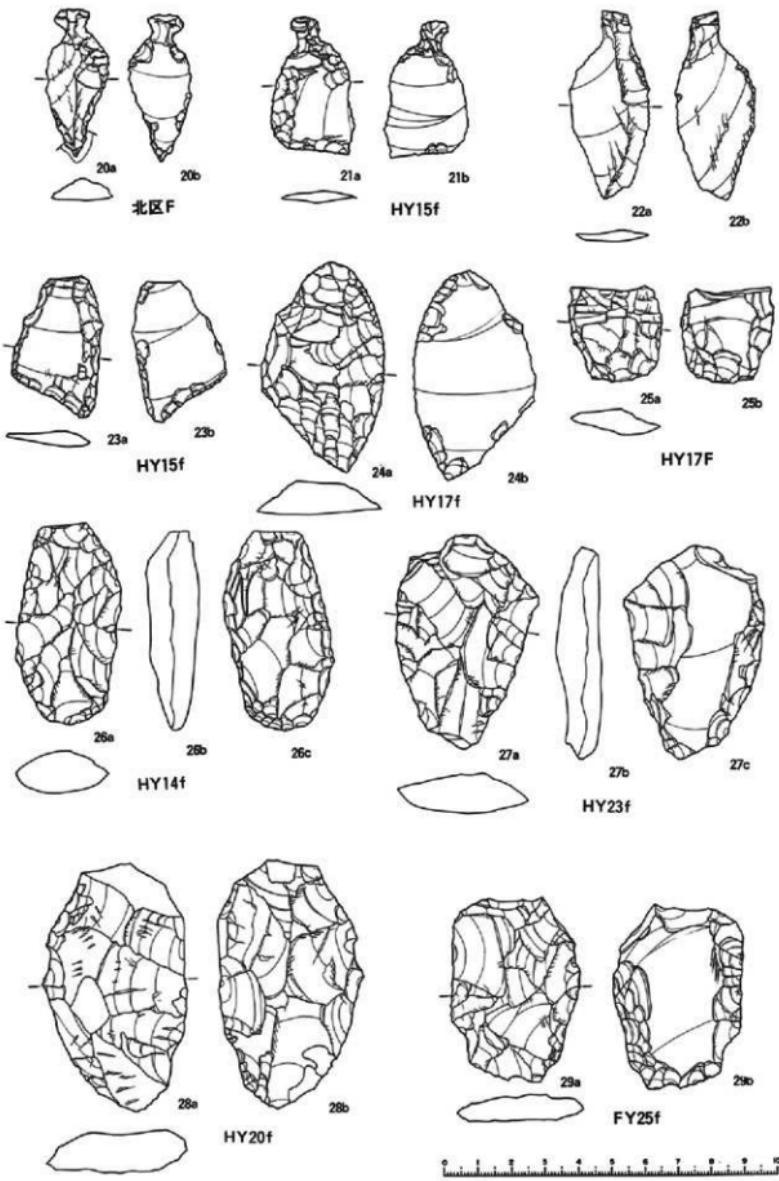
44は基部が、45は尖状部が欠損した形態を呈す。44は尖端部に使用痕が認められることから完成品として使用した際に基部が欠損したものと想定される。46、47も尖端部が欠損した形態を呈す。44の様な尖端部が想定される石器群である。

土器〔第11図、12図〕

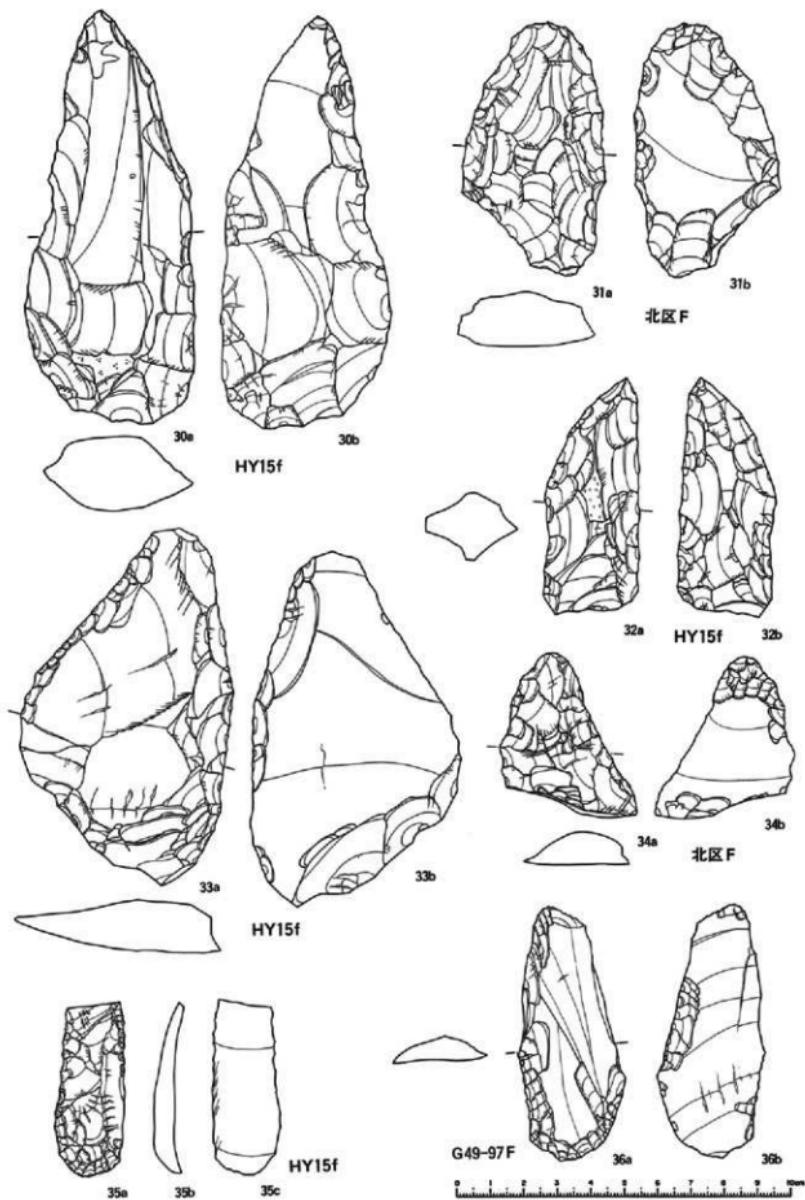
総数で220点出土している。すべて破片であり、文様別の点数はループ文が最も多く93点、次いで斜繩文51点、羽状繩文40点、組紐文17点、刺突文7点、沈線文4点、磨滅による不明土器片60点であった。完形土器は出土していない。



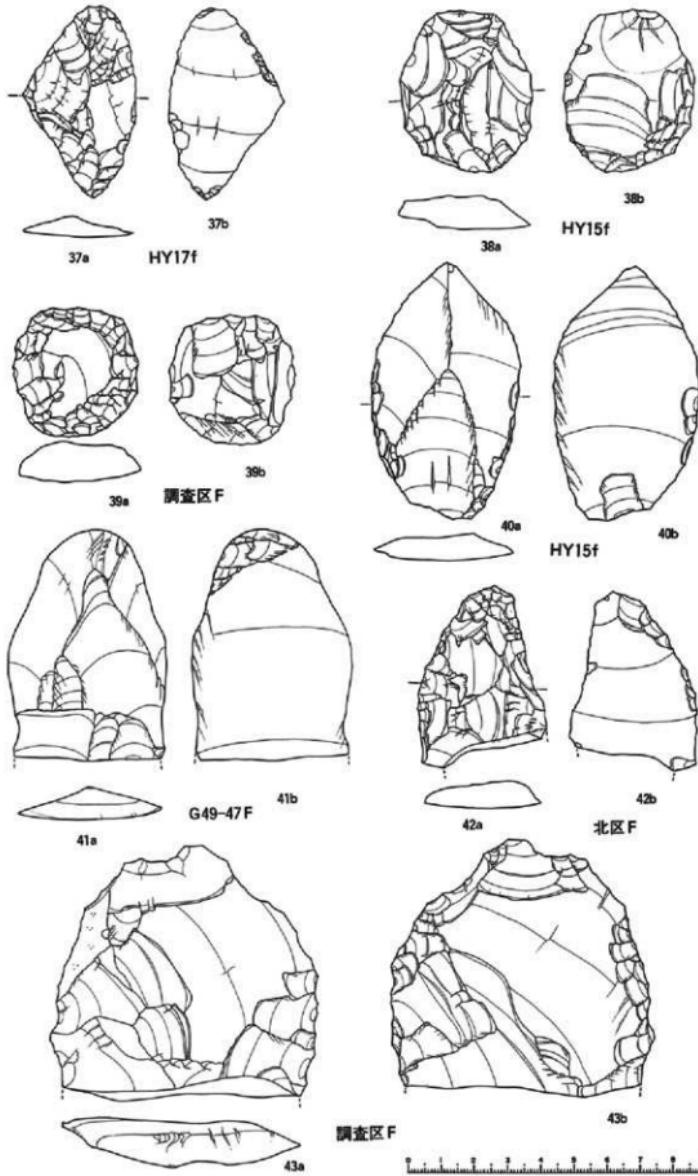
第5図 一ノ坂遺跡第7次調査出土石器実測図(1)



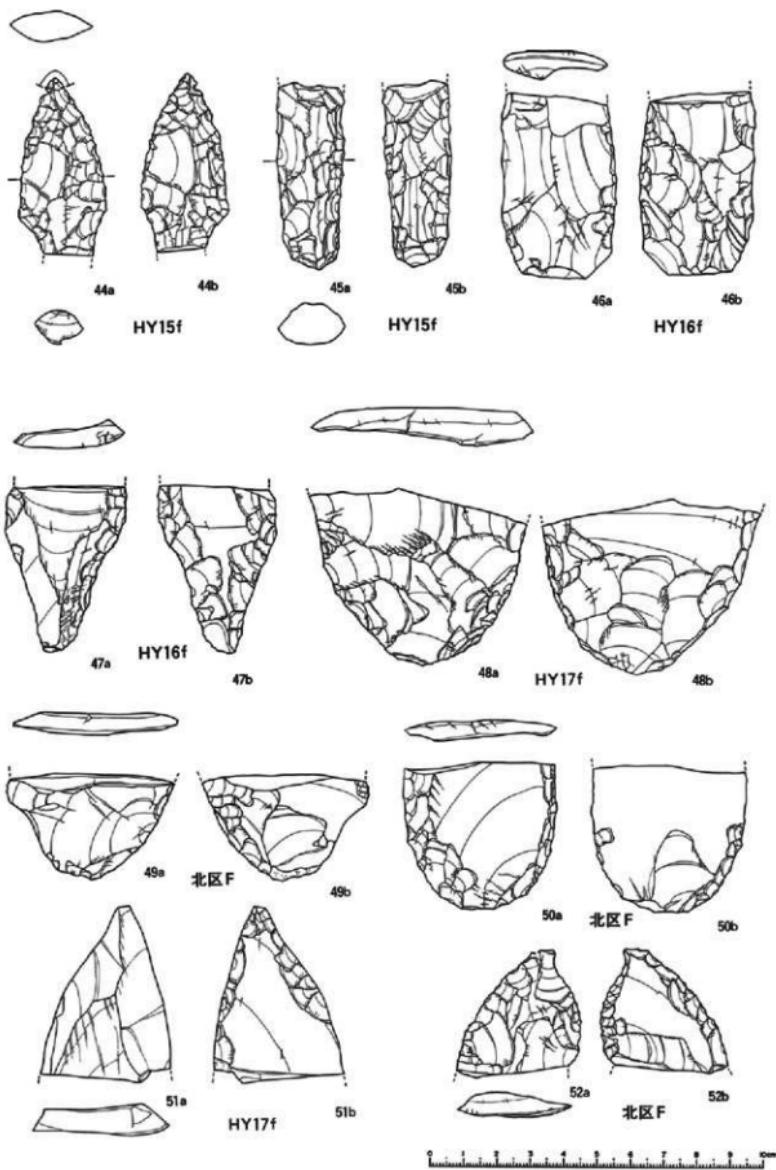
第6図 一ノ坂遺跡第7次調査出土石器実測図(2)



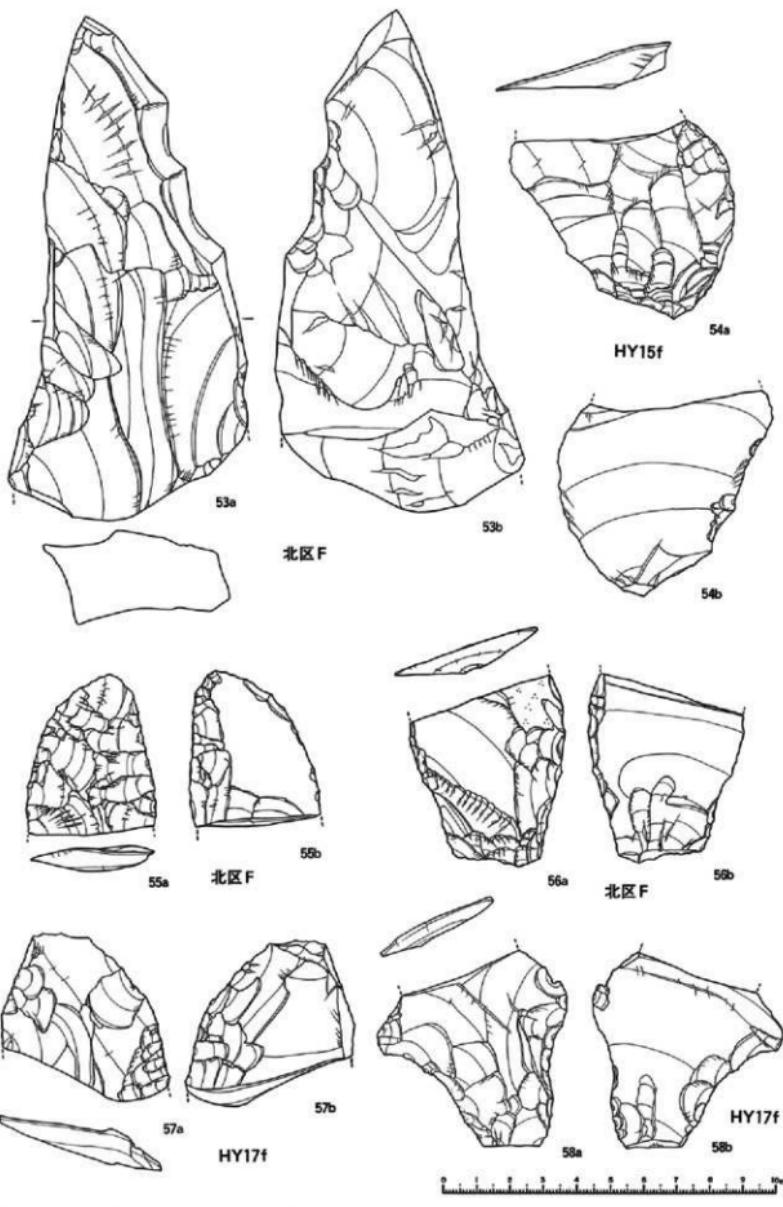
第7図 一ノ坂遺跡第7次調査出土石器実測図(3)



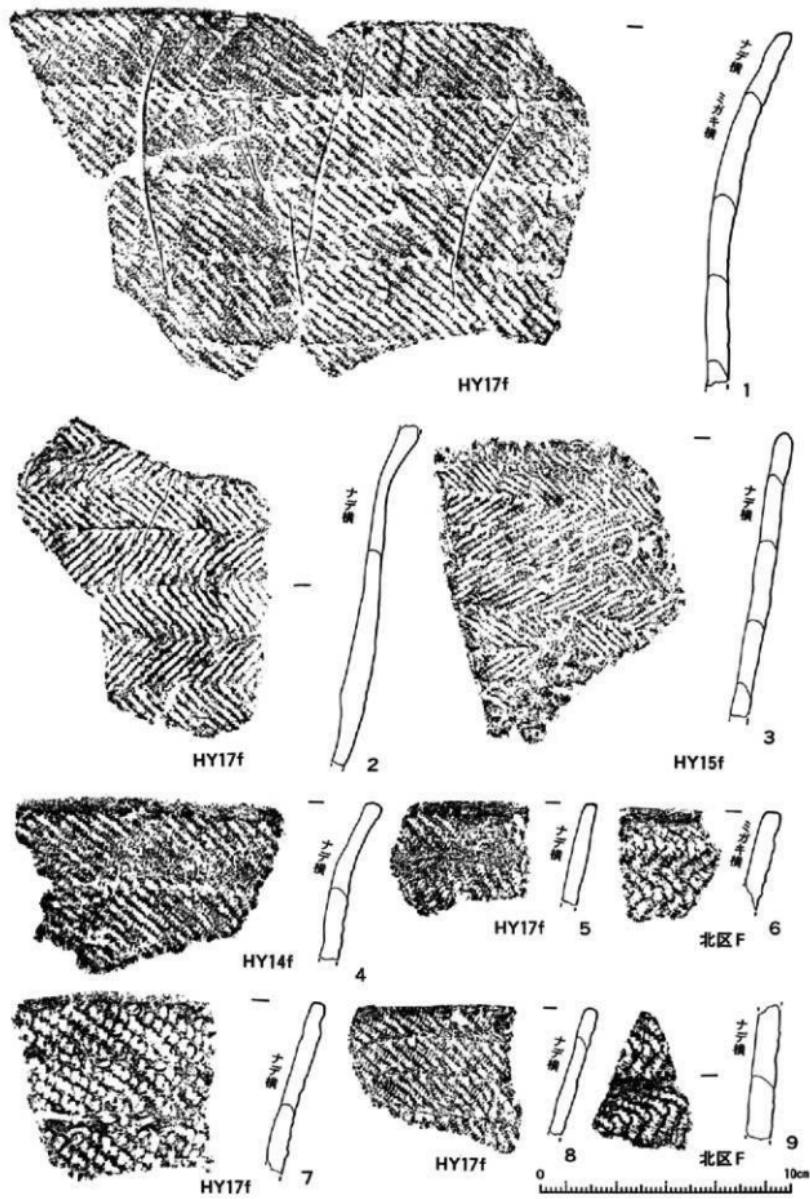
第8図 一ノ坂遺跡第7次調査出土石器実測図(4)



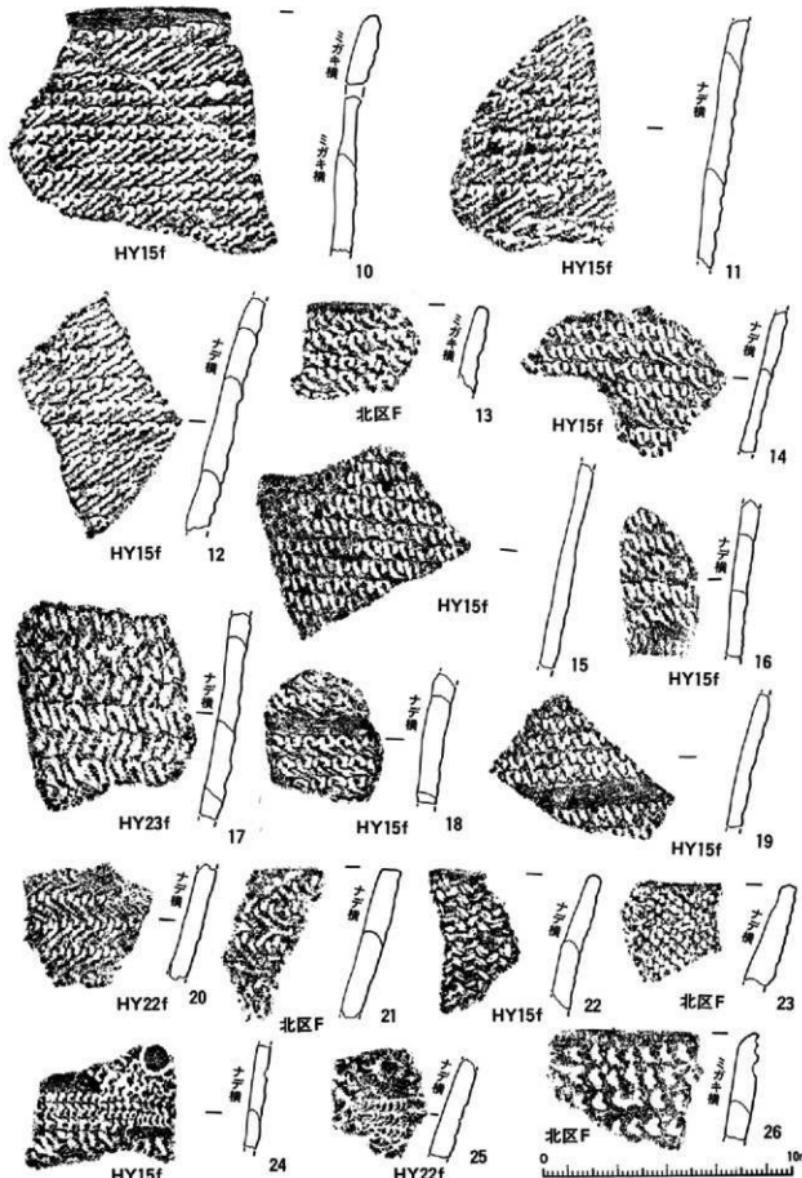
第9図 一ノ坂遺跡第7次調査出土石器実測図(5)



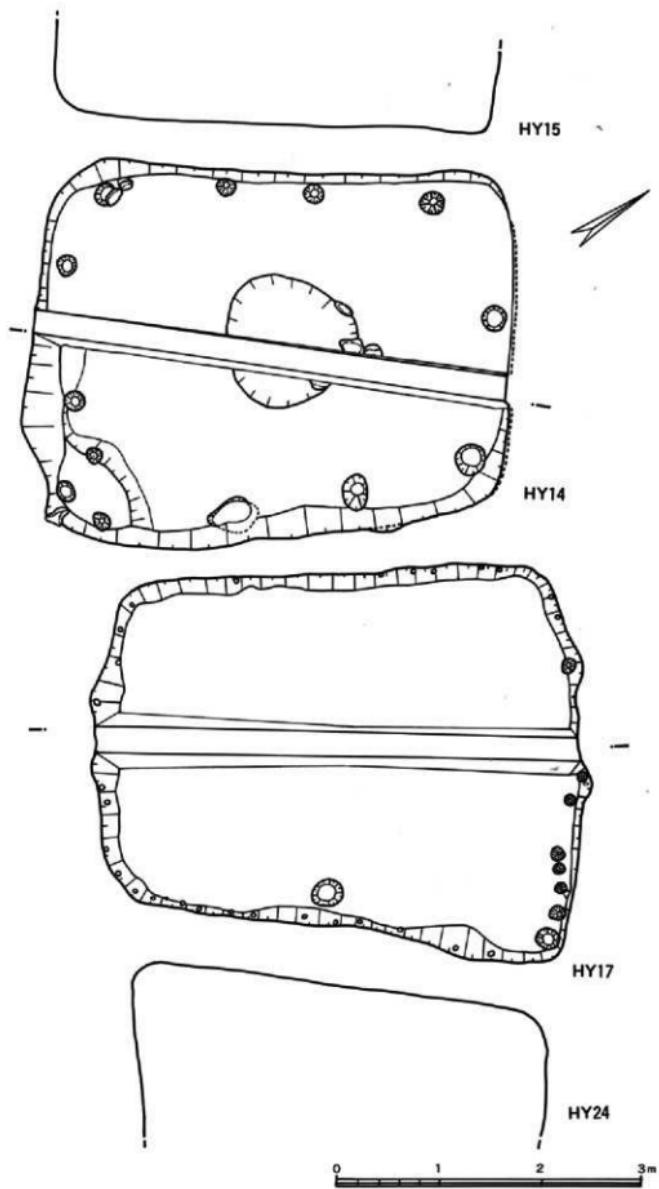
第10図 一ノ坂遺跡第7次調査出土石器実測図(6)



第11図 一ノ坂遺跡第7次調査土器拓影図(1)



第12図 一ノ坂遺跡第7次調査土器拓影図(2)



第14図 一ノ坂遺跡HY14・17平面図

5. ま と め

平成元年度（1989）から開始した本遺跡の発掘調査も今年度で5年目をむかえる。第1次調査から第7次調査までに、確認した住居跡は24棟、土塙は7基を数える。遺物は約139万点にも及ぶ。

プラン確認だけで埋め戻している竪穴住居跡は8棟、床面まで掘り下げ、現状のまま埋め戻した竪穴住居跡は5棟で、現在13棟の竪穴住居跡が現存している。これらの遺構群は、段丘直下の地山を掘り込んで構築した竪穴住居跡である。埋土状況や出土遺物から、第13・14図で示す遺構群は同時期に位置づけられるものである。

一連の発掘調査を通じて、一ノ坂遺跡の全容が次第に明きらかになってきた。大型竪穴住居跡は当初から石器製作工房、今回の調査で確認された「連房型竪穴住居跡」は、石器製作工房で働く人々の生活の場（宿舎）と推測するのが、妥当と思われる。

「連房型竪穴住居跡」は、今回の調査で明確にできたものと考え、全体の構成から見て、今まで呼んでいた、仮称「連房型竪穴住居跡」の呼び名を採用し、第4集から、連房型竪穴住居跡、と記載することにした。

その場合の構成は、HY15、14、17、24、16、22、20、19の8棟と考えるのが、最も適切と想定され、長さは大型竪穴住居跡とほぼ同じ長さの約43cmとなる。HY23を加えて、9棟からなると推測した長さは約50mを測る。HY18は、一連の竪穴住居跡にくらべると西方にずれていることから、連房型竪穴住居に加える事には無理と考えられる。

さらに、HY23には隣接してHY5、HY1が構築されているが、HY18と同様に西方にずれていることから、連房型竪穴住居跡には加わらないものと現時点ではしたい。両端部の竪穴住居跡が同様にずれて、構築されているのは、意図的な配置のあらわれと解釈され、連房型竪穴住居跡とは、異なる目的を持つ竪穴住居跡群と理解したい。

遺物は、大型竪穴住居跡にくらべると極端に少なくなる。また、本遺跡の特徴として、北側調査区の斜面から少量の遺物が出土している以外は、すべて、遺構群からの出土で占められる。包含層が、まだ発見されていないのは、遺跡の存在期間が短期間であったか、あるいは、別に集落があって、一ノ坂遺跡に集結して石器製作をおこなった場所と仮定できる。さらに大型竪穴住居跡から出土した、多量の炭化物は（クルミ）石器製作の他にも、生産の場として活用したことを見ている。

最後になりましたが、今回の調査を実施するに当たり、御協力いただきました丸山亥吉氏、渡部重夫氏、赤木伊勢吉氏、赤木友之氏はじめ関係各位に対し、心から御礼申し上げます。

参 考 文 献

- | | | |
|------------------|-------------------------|----------|
| 1987 松原 | 松原遺跡第1地点の発掘調査報告書 | 置賜考古学会 |
| 1990 遺跡詳細分布調査報告書 | 米沢市埋蔵文化財報告書第27集、18頁～25頁 | 米沢市教育委員会 |
| 1991 一ノ坂遺跡発掘調査概報 | 第1集 米沢市埋蔵文化財報告書第30集 | 米沢市教育委員会 |
| 1992 一ノ坂遺跡発掘調査概報 | 第2集 米沢市埋蔵文化財報告書第35集 | 米沢市教育委員会 |
| 1993 一ノ坂遺跡発掘調査概報 | 第3集 米沢市埋蔵文化財報告書第38集 | 米沢市教育委員会 |

写 真 図 版



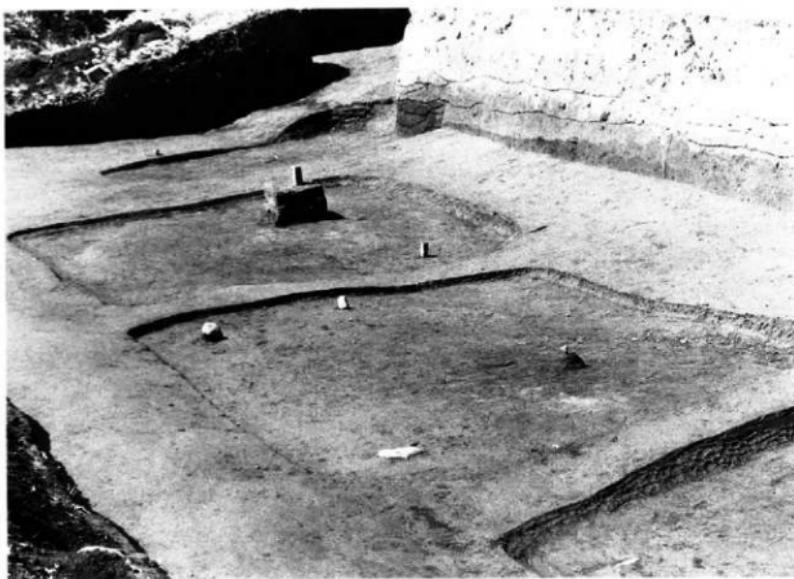
▲HY15・23プラン確認風景（南方から）



▲HY19・18プラン確認状況（東北から）



▲HY22プラン確認状況（東方から）



▲HY20・19プラン確認状況 手前から（北方から）



▲連房形竪穴住居跡 手前からHY17・14・14・23（南方から）



▲向かって左がHY22、右が16のプラン確認状況（東方から）



▲現地説明会風景 HY14・17 (西方から)



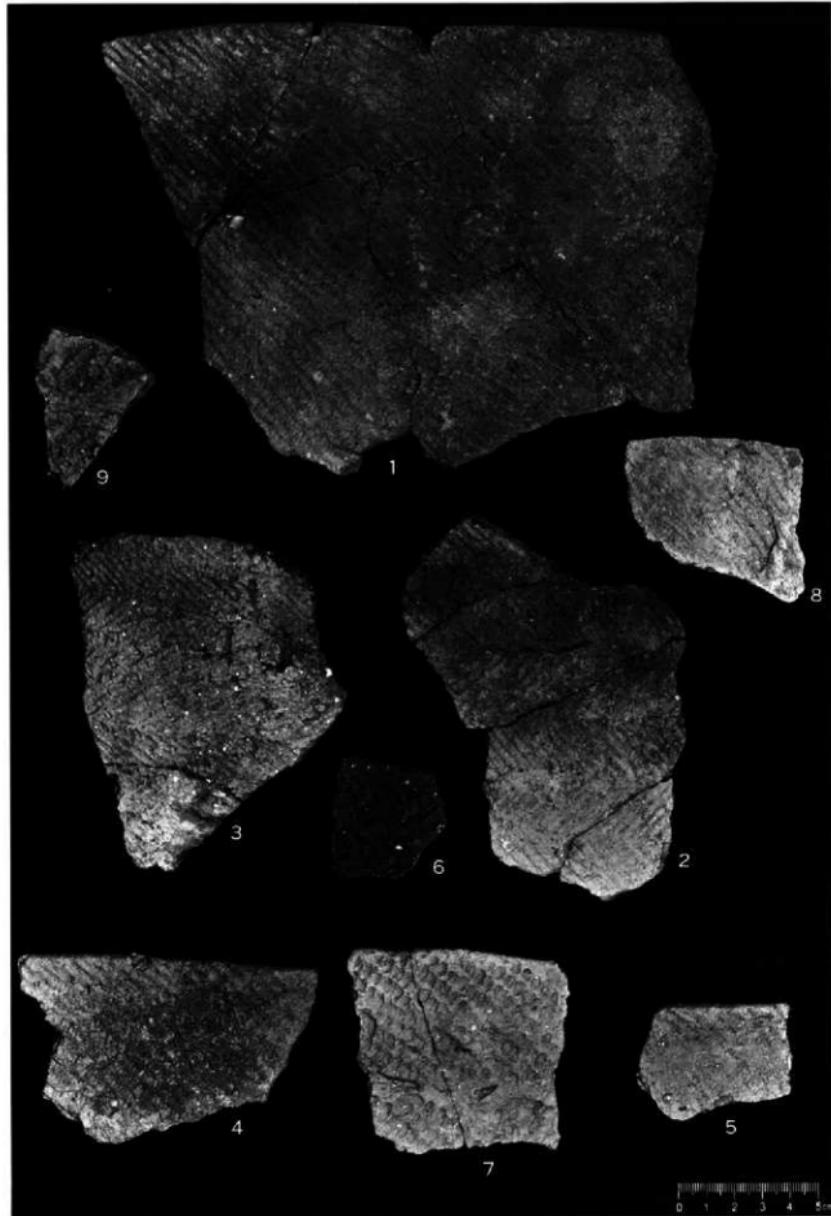
▲連房型竪穴住居跡HY20・22・16・24 手前から (南方から)

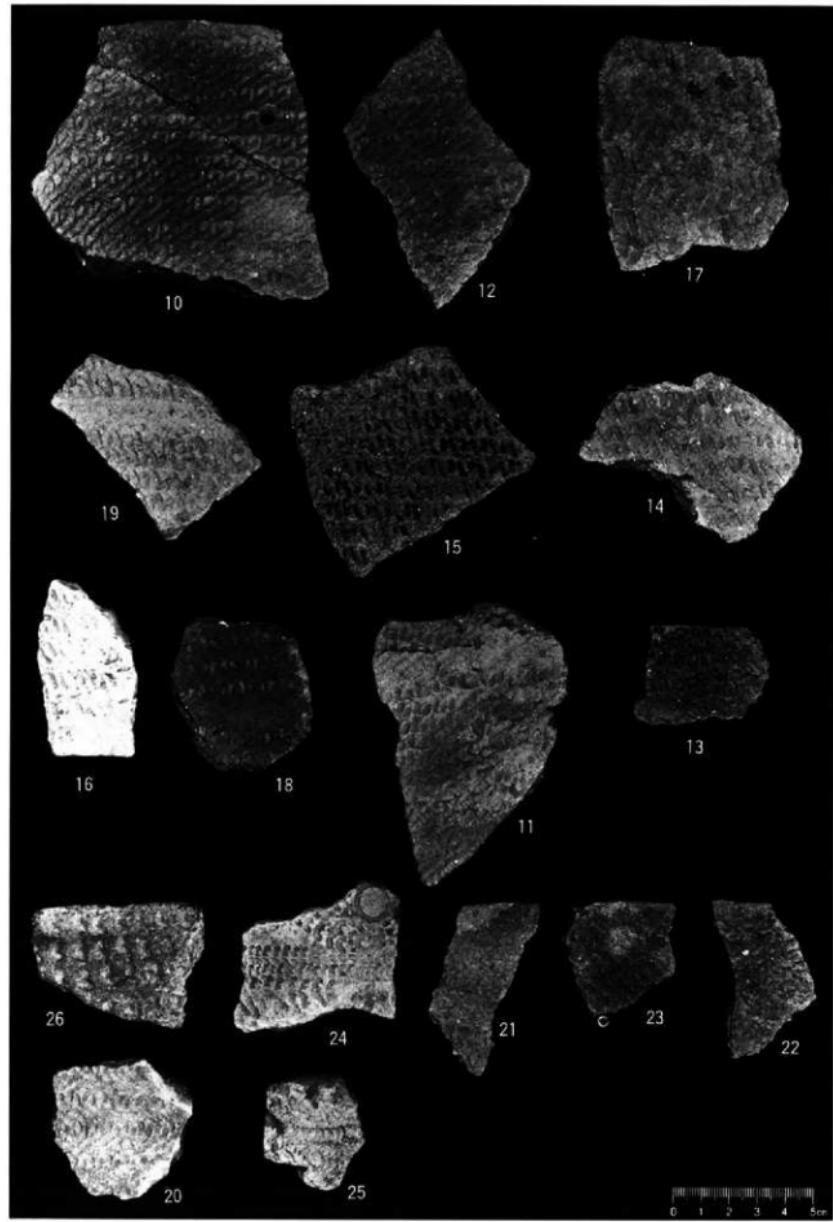


▲HY18プラン確認状況（東方から）

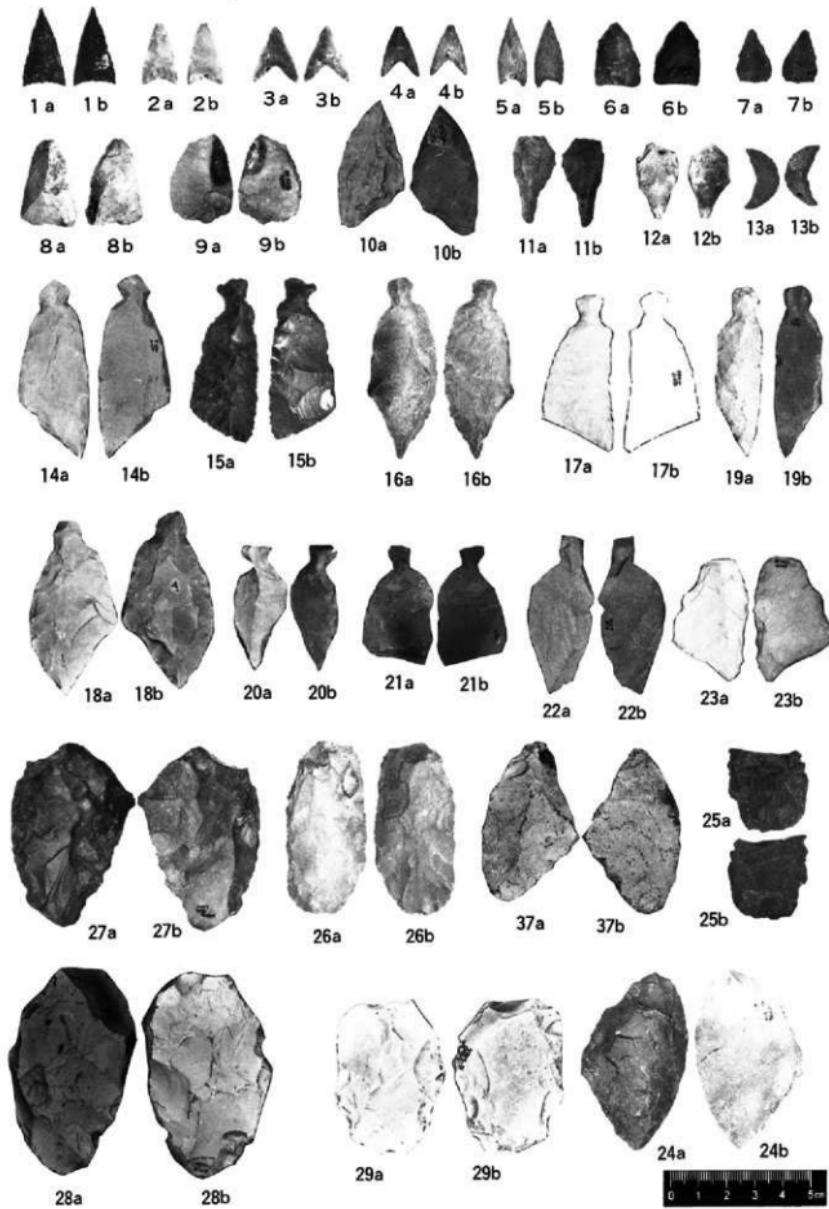


▲連房型竪穴住居跡埋め戻し状況（南方から）

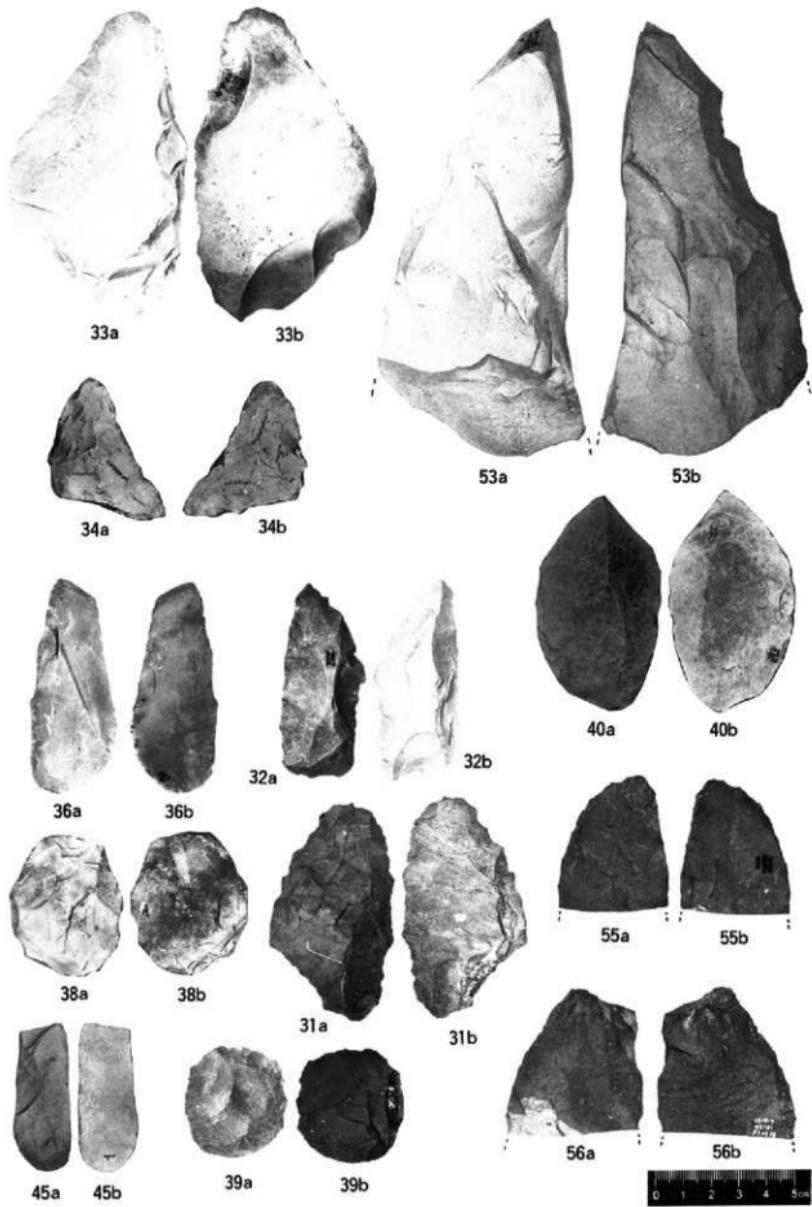


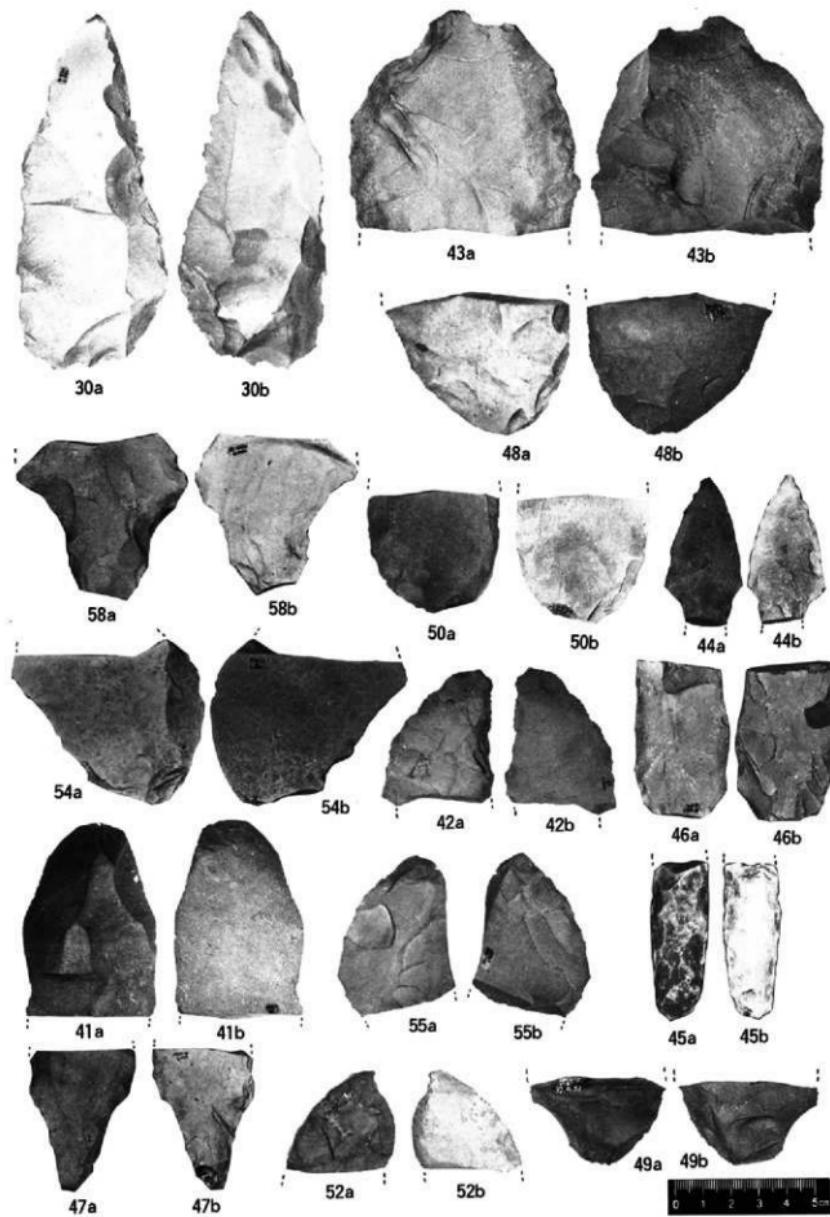


第八図版
一ノ坂遺跡第七次調査出土の石器(1)



第九図版
一ノ坂遺跡第七次調査出土の石器(2)





米沢市埋蔵文化財報告書第40号

一ノ坂

一ノ坂遺跡発掘調査概報
第4集

平成6年3月25日 印刷

平成6年3月31日 発行

発行 米沢市教育委員会
米沢市金池三丁目1-55
TEL (0238)22-5111 内線7504
印刷 織羽陽印刷
米沢市中央三丁目9-22
TEL (0238)23-0467